

(様式第3号)

令和7年11月19日

登米市議会議員 中澤 宏 殿

会派 大地の会
代表 佐々木 幸一

調 査 報 告 書

調査の概要は次の通りであります。

1. 調査目的

①「岡山県奈義町の少子化対策」

奈義町は少子化対策に成功した「奇跡のまち」として知られる。令和元年の合計特殊出生率は2.95とされ、出生率の低下が叫ばれる中、時の総理大臣が奈義町の施策を視察するなど全国的にも注目を集める成果が見られる。

本市においては平成7年に1.82であった合計特殊出生率が令和元年には1.30にまで追い込み、新市発足後も改善されない状況にある。「まち・ひと・しごと創成総合戦略」をもって政策的に取り組むところであるが、「奇跡のまち」と「本市」にどのような違いがみられるか、現地調査も踏まえ検証して本市の取り組みの参考にすることを目的に調査するもの。

②「岡山県西栗倉村の百年の森林事業」

西栗倉村は多様な担い手と実現する「百年の森林構想」を立ち上げ、現在では「林業を主軸に地域再生・自立を実現した自治体」として知られる。その取り組みは国土交通省が「地域発イノベーションを促進する国土づくりの在り方」の成功例としても事例紹介しており、「国土管理」「自然共生」「防災・減災」「地域づくり」などで効果が期待される。

本市の森林面積は4割を超えともいわれ、特に北上川東部地域ではかつて木材資源の確保が盛んに行われ、現在は伐期を迎える。一方で木材生産の衰退も事実であり放置林なども見られる。西栗倉村の取り組みは、単なる山の再生に留まらず新たな投資や起業など、持続可能な自治体を構築させている。本市課題との比較検討を通じ、施策解決の一助として考察する目的で調査するもの。

2. 調査先 ①岡山県奈義町
 ②岡山県西栗倉村

3. 調査の経過と結果と並びに所感
 別紙添付

4. 添付書類 調査先の説明資料

5. 調査者氏名 3名 佐々木幸一、佐藤千賀子、武田節夫

政務調査報告書

- 1, 日時 令和7年11月11日(火) 午後1時半～
- 2, 場所 岡山県奈義町役場
- 3, 参加者 大地の会(佐々木幸一、武田節夫、佐藤千賀子) 太陽の会(氏、家英人、曾根充敏) 熊谷和弘の6人
- 4, 視察内容 「奈義町の少子化対策、合計特殊出生率2.95をどう実現したか」
- 5, 町の概要 人口5,420人、面積69.52km²とコンパクト、自衛隊と共存する町、合併しない単独町を決定する。
- 6, 子育て支援の推移
 - ・H24年4月に子育て応援宣言～町民に行政が約束「安心感」「心強さ」を生む
 - ・経済的支援～小中学校の給食費無償化、高校生までの医療費無料、高校生の就学支援(年額24万円)、在宅育児支援15,000円/月など。一般会計に占める子育て、教育支援事業費は5～6%
 - ・伴走型の産前産後のケア～産後ヘルパー、愛育委員による訪問など
 - ・地域と子育て拠点施設「なぎチャイルドホーム」^子育て世代が通える施設として開放。地域住民による子供の一時預かりなど町民同士で子育てを支える
 - ・しごとコンビ事業～子育てしながら空いた時間に働けるようにする
 - ・住環境の整備～町営賃貸住宅、分譲地整備、空き家リホーム促進

7, 所見

- ・内閣府のデータで理想の子供数を持たない理由として、1つに経済的理由、2つに育児の心理的、肉体的負担の大きさをあげている。これに、町として経済的支援と町ぐるみの子育て支援に力を注いできた。高い合計特殊出生率の鍵は？「安心感」であると感じた。住むところがあって安心、働くことができ安心、子育ての負担が軽くなって安心、子育ての悩みや喜びが共有できて安心。子育て支援の全体像を検証し、登米市で子育てが安心できる環境づくりを再度構築すべきと感じた。

政務調査報告書

- 1, 日時 令和 7 年 11 月 12 日 (水) 午前 9 時半～
- 2, 場所 岡山県西栗倉村役場
- 3, 村の概要 人口 1,318 人、高齢化率 38,7%、面積 57,9 km²、年間予算約 40 億円、93%が森林 (5,400ha) で人工林率 84%、合併協議離脱で自主自立を決意
- 4, 百年の森林構想とは？

① 構想の背景

約 50 年生まで育てた森林の管理をあと 50 年がんばろう、そして美しい百年の森林に囲まれた上質な田舎を実現する構想で前村長が提唱する。木材価格の低下、不在村者の増加で放置された森林が増えたので「村が主体となって森林整備を進める」ことにした。

村の役割：計画的施業（作業道作設、間伐など）美しい村づくり

民間の役割：川下、村の中で作る、使うを担う

②百年の森林事業の基本的流れ

- ・ 個人所有者が村へ山林管理を一時的に委託する契約
- ・ 契約森林は「森林経営計画」「FSC 認証制度」「J-クレジット」に参入し、村と所有者で収益を折半する。

③ 契約状況はどうなっているか

契約目標 3,000ha に対して 1,427ha と約 50%である。高齢化、相続、不在村者の問題で 50%前後であるが、歯抜けの状態でなく、集約化して団地設定できれば効率的でコストも縮減できる。

④ 百年の森林構想でどう変わったのか

- ・ 62 の会社が設立され、100 名以上の雇用が生まれ 8 億円から 23 億円の売上
- ・ 住民の 2 割が移住者で、村外からも注目を浴びてさらに人を呼び寄せている
- ・ 森林の 6 次化産業が進む

⑤ 百年の森林構想の課題解決に向けた取り組み

- ・ 森林資源の定量化～レーザー航測で資源量を正確に把握
- ・ 百森事業の実行体制の改革～プロ集団が必要で、「株」百森を設立する
- ・ 新規契約者の確保～森林信託
- ・ 森林の新たな価値の創造～新たな山の価値の創造、経済林だけでなく里山林、自然環境林などで多様な価値の最大化を図る。

所見

百年の森林構想を前村長が構想し、森林の再生のための商品化（6次化産業）が進んだ。そして、林業の6次産業化が成功し、林業関係者が集まってきた。そこで、以前からの課題であった雇用の問題を幅広い起業で改善しようとして、20

15年 起業する人材を発掘・育成する支援プログラム「西粟倉村ローカルベンチャースクール」を開始した。これによって様々な人材が集まり、福祉・教育・コンサル・クリエイティブなど多様な事業が生まれた（50社）。

村に大きなビジョンがあり、それに関心を持つ人材があつまり、人材育成と支援によって起業が生まれる好循環となっている。登米市も大きな森林という資源を最大限活用するビジョンを持ち、人材と資本の集積を進め森林の最大価値を進めるべきである。

また、説明を受けた職員の方は県外から西粟倉村に就職したそうですが、この村がおもしろそうだと思って応募したそうです。登米市も何か楽しそうだ、面白そうな取り組みをしているなどと思わせるようにして多くの人材を集める仕組みを構築することが求められている。

森林の6次化産業からローカルベンチャーの聖地、そして今後森林の生物多様性に取り組む西粟倉村の視察は、今後の登米市が目指す指針となるものであった。